慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160－8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線62556
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　末舛　恵一
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

平成十六年度 解剖祭 芝増上寺にて開催

本年度解剖225体の諸霊を供養

本塾の医学教育を目的として解剖に付された諸霊に感謝し、冥福を祈る『解剖諸霊供養法会』が九月二十二日、遺族、医学部関係者ら多数の参加のもとに、芝・増上寺にて開催された。

解剖諸霊供養法会は、昨年度中に医学教育・研究目的で解剖に付された計二二五人の供養を目的として行われた。

当日は、遺族多数のほか、本塾より安西祐一郎塾長、医学部からは北島政樹医学部長（外 45回）、相磯貞和解剖学教室教授（解 55回）、岡田保典病理学教室教授（病 53回）、坂元亨宇病理学教室教授（病 64回）が参列した。また昨年、系統解剖実習を行った三年生（87回）も全員が参列し、医学教育のため献体された諸霊の冥福を祈った。

式は午後二時定刻より本堂にて始まった。まず北島医学部長の祭文奉読があり、続いて読経と、参列者による焼香が行われた。最後に、医学部教職員を代表して坂元病理学教授により挨拶があり、午後三時前に、式典のすべてが終了した。

祭文の中で、北島医学部長は『解剖に対するご理解が深まって来ていることは私共、医学に携わるものにとり、大変意義深いものであると同時に、なお一層心を引き締め、医学の道に邁進しなければならないことを痛感している』と述べ、献体諸霊と遺族に対して深い感謝の意を表した。

また、坂元病理学教授は『難治の病を克服すること、そしてその克服に取り組む次世代の医師を育てることが我々の使命である』として、医学教育と医学の発展に一層努力してゆく考えを示した。

昨年解剖に付された二二五献体は、多くが白菊会や篤志家によるもので、本塾医学部がこれまでに教育、研究目的で解剖した献体は総計二万五八四一体となった。

解剖祭で祭文奉読を行う北島医学部長

三四会全国支部長会議

明治記念館で盛大に開催

開会の挨拶を述べる末舛三四会長

かねてよりの懸案であった三四会支部長会議が十月二日午後六時三十分より明治記念館で二十四名の支部長が参加して開催された。今回の開催は始めての企画でもあり、三四会員のまとまりを強化することに目的があるため、事前に全国各地支部八十五のうち支部長確認の六十支部にアンケートをおくり各支部の意向を打診するなどの準備を行った。又相互の最近の情報交換として、医学部側からは教育改革について、又三四会員で日本病院会、日本医師会の責任ある立場からの発言があり、最後に事前に依頼したアンケートの集計結果報告などがあった。

なお当日来賓として参加した安西塾長は三四会員の活躍への期待の言葉として次の様に語った。『慶應医学部は教育・研究・経営・医療などの面でトップレベルにあるが更に最近は経営ボードによる病院経営改善を目指し着々とその成果をあげつつある。現在計画中の案件は塾の長期計画の一環としてのものである。今後とも北里先生の教えに従い日本医療の先導の方向を歩んで頂きたい』

三四会定例理事会
―平成16年9月24日―

報告事項

一、九月十日港支部総会 理事一名出席

二、九月十八日埼玉支部総会 会長出席

三、十一月三日開催予定（於三田キャンパス 西校舎ホール）の東洋医学講座主催による市民公開講座、テーマ『高齢社会を支える漢方』に後援会として三四会の名義使用の依頼あり。

四、明年一月～二月に恒例の赤倉山荘行スキーツアー実施予定。

報告事項

一、三四会奨励賞選考を終え臨床医学分野候補七名より五名、基礎医学分野候補五名全員、社会貢献部門候補二名全員を受賞者として選定した旨の答申あって各部門すべてを承認。

二、平成十五年四月一日着任の生理学柚崎通介教授（自治医大 昭54卒）の三四会入会を承認。

三、三四会退会後その数回の申し入れあった一名の入会を承認。

三、渋谷和彦（青山学院大 平3卒 分子生物学教室） 澤本和延（明治大 平2卒 生理学教室） 両名の三四会入会申込を承認。

四、将来計画検討委員会実施報告。

五、全国支部長会（十月二日開催予定）の企画内容につき報告。

六、来年の名簿発行予定にあたって諸般の事情により印刷所が変更となる関係で在来の名簿内容につき不備の点を改善する目的で担当業者を交え意見交換するも結論に至らなかったので後日再度調整することとする。

七、連合三田会開催にあたり昨年同様福引券に赤倉山荘宿泊券を提供。

八、昨年迄実施の『留学生を励ます会』の名称を『海外研究者との交流の会』と改め本年も実施の予定。

九、医学部大学院生への支援目的で提供した三四会よりの寄付金は医学部困窮学生援助その他の支援資金に内容変更の方向で再検討する。

お願い

八月末より各地三四会支部長又は幹事の方に連絡表をお送り致しておりますので支部としての活動（行事、人事消息、その他）をおしらせ下さい。毎月十日迄にご連絡頂いた内容について掲載させて頂きます。　編集室

人事

【異動】

江川 寛（病管 特33回）

大学病院経営業務担当執行役員

（大学病院経営業務担当執行役員兼大学病院事務局長）

論壇
産業医の人事
百溪　浩

当医学部では伝統的に産業医学（産業衛生、労働衛生）が研究されて来たことは言うまでもないが、医学部全体として特に注目されたのは、昭和三十年代から四十年代の高度成長期に日本医師会長、武見太郎先生が日医誌や講習会などを通じて産業医学の重要性を唱え振興に努められた時期だと思う。それが労働安全衛生法制定、産業医法制化更に産業医科大学の設立につながったとも言え、当医学部新聞の産業医学特集記事などの底流にもあるのではあるまいか。医師会の産業医学講習会がそのまま発展し、その受講が産業医資格要件の一つになっていることは周知のことである。

さてこのように時に脚光を浴びることもあるが、産業医学は疾病構造や社会経済情勢により消長が大きいとは言え、その後の医学部での産業医学への関心ははなはだ心もとない。当医学部新聞の産業医学や産業医に関する診療記事も、どこまで注目されているのであろうか。

産業医学特に産業医活動は、近年少なくともわが国、特に大企業では、その得意とした作業環境や作業条件などに関連する健康障害は（多くの先達の努力もあって）明確なものは減少し、産業医学的なニーズも一般疾患の予防が多くを占めるようになり、その特性が薄くなったのも関心の薄れる一因かも知れない。実践産業医学では専門医より一般医的要素が多くなっているわけである。数年前に、勤めていた企業で健康管理についてアンケート調査を行ったが、健康管理・診療所の対する要望の第一位は〝良い病院、良い専門医を紹介して欲しい〟であった。ちょっと情けない気もするであろうが、社員の適切な医療機関への紹介は一般医としての産業医の重要な仕事の一つである。また、どのような健康障害を扱うにしても産業医は常にその企業の特殊性を理解し作業との関連を念頭に置かねばならないのは何時の時代でも変わらない。その企業の産業医にしか出来ないことで、産業医の存在意義がある。産業医の使命が変わったわけではない。法律があるから産業医があるのではない。

産業医学と産業医の現状について簡単に述べてみたが、このような背景のもとでは産業医の人事は限られた分野からではなく広く多分野から適材を求めて行くのが適当であると考えられる。唯当面の医師供給側である医学部ないしは医局側の考え方は単純、冷淡と言うべきであろう。医学部の医局からの慣習的医師派遣は、以前からその得失に議論が多く、最近は何かと物議をかもして医局の廃止などの動きもあるが、現状では医局に多くを頼らざるを得ない。産業医や企業の診療所医師の派遣も関連病院と同様で、派遣を行っている医局は単なる医局関連人事の一環として行っているに過ぎない。奇妙な話であるが、企業側の人事担当者には殆ど主体性はなく、〝お医者さんは別枠〟と言うことでその主医局人事が容認され、適材かどうかは別問題である。前述のように多くの企業では医師の特殊性にあまりこだわりもなく、またその必要性も少なくなってきているが、それだけに産業医学実践側としては、適材を広く求めて欲しい希望がある。産業医大では一般の学部と同様な求人求職方式をとっていると聞く。慶應医学部をはじめ一般の医学部の場合この形態は無理であろうが、産業医の派遣は医局に限定すると言うのでなく、もう少し組織化し、医学部長室のような所に窓口を広げて、そこで情報をまとめて適切に医局に振り分けるなど、企業の条件によっては年齢などを問わず広く人材を選択出来るようにすべきであろう。例えば内科系より外科系の方が適材のこともあり、そのような希望に沿うことも出来る。医局の横のつながりをつけ、人事の公平も図ることが出来る。縦割りになりがちな医局制度の欠点を補いつつ、その制度の活用にもつながるのではないか。産業医の就職を通じて、ささやかながら医局制度の改革に繋がるかもしれない。因みに企業によっては、医師派遣の窓口責任者を医学部長と思っている所もあるが、世間的には当然なことである。学問は分化から統合へと言われるが、医学は益々分化、専門化が進んでいる。臨床面ではさすがに支障が出て、改善もされつつあるが、産業医は以前から専門医であるとともに一般医であるべきとされてきた通り、その適材は広く求められるべきである。

産業医大では産業医としての就職口が不足してきていると言う。産業医だけで就職口を求めることに無理があるのであろうが、全体としてもいずれ産業医も就職難になるかも知れない。産業医は法で規制され（あまり言いたくないが）安定した職ではあるが、現実は安全衛生部門への風当たりが強い。しかし本来は、決して華々しくはないが、自由化された自然発生的な職で、その至高の資格要件は労働衛生的感覚、労働者保護のスピリットの有無である。またその質の維持のためにも、慶應医学部当局者は産業医の派遣人事にも意を注ぎ、このスピリットのある適材を送り出して欲しい。

（労働衛生コンサルタント　衛 40回）

2004年 連合三田会大会
テーマ〝今こそ独立自尊〟を

連合三田会大会会場入口

十月十七日、大学日吉キャンパスにて、今年も慶應連合三田会が行われた。天候にも恵まれ、キャンパス内は朝早くから塾員・塾生や家族連れなどで賑わった。

今年は『今こそ独立自尊』が大会のテーマであった。池田良子二〇〇四年三田会大会実行委員長からは、世の中がめまぐるしく変化し、自己責任に基づいた思考や行動が求められる時代であるからこそ、福澤諭吉先生が六十六年の生涯をかけて絶えず提唱されたこの言葉を社中の指針とすべきであるという話があった。

日吉記念館では朝から記念式典が行われ、池田実行委員長はじめ服部禮次郎連合三田会会長、安西祐一郎塾長の挨拶ならびに祝辞があった。今年卒業五〇周年を迎え、今大会に招待された一九五四年卒業生を中心として、塾旗掲揚・塾歌斉唱では会場内の社中各位が一つとなった。今年は日吉開設七〇周年ということで、戦災からの復興など多くの塾員や関係者の協力によって日吉キャンパスが歴史を刻んできたという『社中一致協力』を再認識する機会ともなった。

続いて三田会員バンドによるコンサート、中村雅俊と松任谷雅俊によるトーク&ライブが行われ、記念館は軽やかな音楽と笑顔に包まれた。

この他には、二〇〇八年に迎える塾創立一五〇周年にむけた『諭吉長崎遊学一五〇年』パネル展、坂村健による特別講演『どこでもコンピュータの時代』が行われ、日吉グラウンドではフットサル広場や日吉秋祭りが行われ、特に家族連れが楽しんでいた。

今年は一九六四年、一九七四年、一九八四年、一九九四年、二〇〇四年の卒業生が実行委員当番であった。その努力により、訪れた人それぞれが楽しめる連合三田会大会となった。

（関連記事3面）

落穂
三四会の現状と将来

十月初旬、三四会全国支部長会議が開催された。支部組織の強化を目的とした会議内容とされているが会議内容と成果については何れ発表されて会員の評価を受ける時が来よう。

三四会員の殆どは学外にあって医療施設、大学、官公庁や自営を含めて各方面で活躍している。これら会員が三四会に対しどの様な認識を持っているのであろうか。それは学術団体における学問上の関連ではない。又趣味やスポーツなどの同好会や団体とも異なる。勿論雇用関係などとは全く異質のものである。いうならば、慶應で医学を修めた仲間同志の集合体、つまり『同郷のよしみ』ともいうべき共通意識を持った集団といえよう。そして心情的には母校に対する愛着を抱き学業を終えた後年月を経ても誇りを失うことがない。これが三四会を創立以来今日迄存続させ得た支柱となっている。

平常の三四会員相互間の親近感や友誼を旨とした交流は同門意識下の現象であることは勿論だが、むしろその根底には生存への知恵の結集があることを否定出来ない。従って大多数の会員が一致した行動をとる場合は三四会自体に対する危機感を意識した場合である。過去半世紀の間の事例としては、45空襲により焼失した慶應病院の再建を強力に支援し、当時三田側で囁かれていた医学部廃止の動きを封じた事実があり、今一つは70代に発生した学園紛争の混乱に対し事態収拾への機運が開けたのも三四会員の協力の結果であった。

会員の親睦が維持されている要素に今一つあるのが『寛容さ』である。これが慶應社中の気風と共に慶應ナショナリズムともいうべき排他の風潮皆無の発想に連なっているのだが反面生存の危機以外の問題については明確な意志表示を行わない傾向がある。その結果、時として会員の意向を無視した行動をとる者が出現した際その暴走を阻止するべきタイミングを失い、相互信頼に影響を来す場合も生じた事態を過去に経験している。

三四会が会則に示されている親睦と母校への協力とを実現するためには会の運営にあたって会員の意志を充分理解し尊重した上で統括し会の運営を図るべきである。又会員としては執行部の運営状態を無批判に受け入れることなく存分に意見を述べる勇気と機会を持ってこそ三四会員の集合体としての生きた存在の姿といえよう。

（Y）

今秋に受賞の三四会員

御子柴教授（東大医科研 生48回） 武田医学賞受賞

武田科学振興財団は日本の科学技術研究の振興助成ならびに文化の向上・発展をめざし、医学界において顕著な貢献をした研究者に『武田医学賞』を贈呈している。本年度、御子柴克彦東京大学医科学研究所教授が『脳神経系の発生・分化機構の研究』での受賞が決定し、十一月十三日に贈呈式ならびに祝賀会が開催される。

本賞はこれまでにIgE発見者石坂公成博士、細胞融合発見の岡田善雄博士、PKC発見の西塚泰美博士、カルモジュリン発見の垣内史朗博士、グルタミン酸受容体の中西重忠博士、免疫の本庶佑、岸本忠三両博士らのように世界に輝く成果をあげた方々がこれまでに受賞している。

今年で丁度五〇周年を記念するため、記念式典も十一月十二日に開催され、節目の大切な大きな受賞となっている。黒川清学術会議会長・植松治雄日本医師会会長・文部科学省清水潔局長・厚生労働省岩尾総一郎局長をはじめとして各界の重鎮が参加する。

御子柴博士の談話『民間で最も大きな賞を頂くことが出来、大変光栄な事と考えています。発生・分化の研究に基づくIP3レセプターの発見など若い多くの研究員の力の結集によるもので感謝しています。今後、更に大きく研究を展開させてゆきます』

慶應出身者としてははじめての受賞であり、今後御子柴博士に続く人材を慶應から輩出することが期待されている。

澤本和延講師（生 特69回）へ 日本神経科学学会奨励賞

九月二十一日から二十三日まで、第二十七回日本神経科学大会と第四十七回日本神経化学大会の合同大会（Neuro 2004）が大阪国際会議場において開催された。会期中に開催された日本神経科学学会総会において、塾医学部生理学教室専任講師の澤本和延講師は、『中枢神経系前駆細胞の可視化・分離・移植技術の開発と生物学的性質の解析』により平成十六年度日本神経科学学会奨励賞（Japan Neuroscience Society Young Investigator Award）を受賞した。この賞は、顕著な研究業績を有するとともに将来本学会で活躍することが期待される若手研究者を奨励することを目的として創設されたものである。

（提供　生理学教室　教授　岡野栄之　62回）

村井　勝教授（泌 46回） AUA名誉会員に

このたび米国泌尿器科学会（AUA）本部より泌尿器科村井勝教授の下へ名誉会員証が送られてきた。同教授は昨年同学会理事会において米国人二人とともに名誉会員に推薦され、今年度の総会において承認された。一九〇二年に設立された米国泌尿器科学会は現在、約一万四千人の会員数を擁し、泌尿器科学の分野では質・量ともに最も優れ、世界をリードしている学会である。名誉会員は二十名でうち外国人は五名である。一〇二年の歴史の中で日本から名誉会員となったのは村井教授は三人目であり、又日本泌尿器科学会会長さらに理事長を歴任し、WHO国際泌尿器疾患機構副議長および国際泌尿器科学会理事も務めており、今後ますます国際的な活躍が期待される。

名誉会員証を受けた村井勝教授

趙　枕氏（微・免 特72回） 米国骨代謝学会より Young Investigator 賞を受ける

第二十六回米国骨代謝学会（American Society for Bone and Mineral Research）が、九月三十日から十月五日まで米国シアトルで開催された。微生物学・免疫学教室助手の趙枕（ザオ・チェン）君（特72回）は、『破骨細胞と骨芽細胞間のエフリンB2―エフB4による両方向性シグナル伝達が骨形成を促進する』というタイトルで基礎医学部門のプレナリー口演を行った。破骨細胞による骨吸収の抑制と骨芽細胞による骨形成の促進を同時に起こす両方向性のシグナル伝達の存在を初めて示したことが評価されYoung Investigator賞が与えられた。

（提供　松尾光一　65回）

日本対がん協会賞 尾形・八十島・山崎ら 関東勢トリオが受賞

平成十六年度日本対がん協会賞の個人の部における受賞者八名中三名の三四会員が該当者となった。その三名は次の様である。

尾形悦郎（栃木県立がんセンター名誉病院長　外 41回）

八十島唯一（神奈川県産婦人科医会会長　産婦 37回）

山崎實一郎（前埼玉県医師会会長　外 35回）

受賞は恒例の『がん征圧月間』開始の九月一日にこれら受賞者が公表され九月十七日、栃木県総合文化センター（宇都宮市）にて開催のがん征圧全国大会において表彰状が授与された。

三名を代表して八十島唯一氏は次のようなリポートを寄せた。

『日本対がん協会賞は選考の基準がきびしく対がんをめぐっての予防・検診などについての指導、啓蒙活動に地道な努力と功績あった個人・団体が対象となっている。又今回の様に同級生三名が同時受賞の機会に恵まれたことは極めて稀ではないかと思う』

日本対がん協会賞　対がん運動に功績のあった個人および団体を選んで、がん征圧全国大会の席上、表彰している。創立一〇周年の昭和四十三年（一九六八年）から始まり、検診の第一線の指導やシステム開発、第一線の検診・診断活動、がん予防知識の普及や啓蒙活動などに地道な努力を重ねた方々や、団体が対象になっています。個人は毎年二人から数人、団体は一ないし複数団体が選ばれる。

平成十六年度（二〇〇四年）の受賞者は個人八人、団体二に決まり、九月十七日の『がん征圧全国大会』で表彰、これまでの受賞者計は、個人一六五人と、一〇三団体になった。

（関連記事3面）

受賞の関東勢トリオ、左から尾形、山崎、八十島

お願い

教室の人事消息、主催する行事など、三四会員への弘報として適当な事項をお知らせ頂く目的で毎月『連絡表』をお回し致しておりますのでご記入の上ご連絡下さる様お願い申し上げます。　編集室

平成十六年度 三四会員が会長担当の定例学術集会
―十一月～十二月開催の集会―

（日本学術会議又はそれに準ずる学術集会、但し支部会は含まない）

学会名
一、会長名　所属
二、会期
三、（開催地）会場

第8回日本医療ガス学会
一、武田純三（麻 52回）麻酔科教授
二、十一月五～六日
三、（東京）砂防会館

第13回日本婦人科がん検診学会学術集会
一、宇田川康博（産 52回）藤田保健衛生大学産婦人科教授
二、十一月六日
三、（東京）大手町サンケイプラザ

第24回日本臨床神経生理学会
一、古賀良彦（精 50回）杏林大学精神神経科教授
二、十一月十七～十九日
三、（東京）ホテル日航東京

第37回日本小児呼吸器疾患学会
一、川崎一輝（児 58回）国立成育医療センター呼吸器科医長
二、十一月十九～二十日
三、（東京）こまばエミナース

第19回日本臨床リウマチ学会
一、近藤啓文（内 45回）北里大学内科診療教授
二、十一月二十六～二十七日
三、（東京）京王プラザホテル

第20回日本ストレス学会
一、相澤好治（衛 50回）北里大学衛生学・公衆衛生学教授
二、十一月二十五～二十七日
三、（横浜）横浜市開港記念会館

第49回日本未熟児新生児学会
一、堀内 勁（児 48回）聖マリアンナ医科大学小児科教授
二、十二月五～七日
三、（横浜）パシフィコ横浜

21世紀COEプログラム「低侵襲・新治療開発による個別化癌医療確立」

腫瘍医学コース

受講対象者：低侵襲COE RA
COE関係者・学部生・大学院生・リサーチパーク研究者等 参加自由
各回 月曜日18時から19時30分
総合医科学研究棟1階ラウンジにて開講

講義日	開始時間	講師	所属	演題
2004年11月1日	18:00	河上 裕	先端医科学	がんに対する免疫療法と遺伝子治療
	18:45	田野崎 隆二	国立がんセンター	骨髄造血幹細胞移植による低侵襲な新規がん治療の開発
11月8日	18:00	樽井 正義	文学部	研究倫理
11月15日	18:00	上田 政和	外科学	細胞膜表面発現タンパクを分子標的とするミサイル療法の開発
	18:45	北川 雄光	外科学	がんの微小転移診断と治療への応用
11月22日	18:00	木崎 昌弘	内科学	造血器腫瘍に対する分子標的療法の現状と問題
	18:45	藤井 博史	放射線科	分子標的薬剤を用いた分子病態の画像化の試み
12月6日	18:00	谷川原 祐介	薬剤部	抗がん剤の臨床薬理学
	18:45	久保田 哲朗	外科学	消化器癌化学療法の標準化と個別化
2005年1月17日	18:00	伊藤 守	(財)実験動物中央研究所	免疫不全マウスを用いた腫瘍医学研究
1月31日	18:00	坂元 亨宇	病理学	腫瘍病理学におけるトランスクリプトーム・プロテオーム研究
	18:45	武林 亨	公衆衛生学	がん臨床疫学研究のデザイン・ストラテジー
2月28日	18:00	永田 博司	内科学	癌のリンパ行性転移
	18:45	荒井 恒憲	理工学部	光による低侵襲癌診断・治療法Photodynamic diagnosisとPhotodynamic therapy

「2004年度腫瘍医学コース」コーディネーター：木崎 昌弘（内科学 血・感・リ）
お問合せ：医学部研究支援センター COE担当coe-med-staff@adst.keio.ac.jp